

2024 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

|       |                              |
|-------|------------------------------|
| 研究課題  | 戦後フランスの散文表現と抽象絵画の相関関係についての研究 |
| キーワード | ①言語とイメージ、②戦後フランス、③非西欧文化      |

研究者の所属・氏名等

|                             |                                                                                                                                                                           |
|-----------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| フリガナ<br>氏 名                 | ミヤワキ エリ<br>宮脇 永吏                                                                                                                                                          |
| 配付時の所属先・職位等<br>(令和6年4月1日現在) | 桃山学院大学 国際教養学部 講師                                                                                                                                                          |
| 現在の所属先・職位等                  | 桃山学院大学 国際教養学部 講師                                                                                                                                                          |
| プロフィール                      | 2015年パリ-ソルボンヌ第四大学博士後期課程フランス文学専攻を修了後、日本学術振興会特別研究員PD、甲南女子大学国際学部特任講師を経て、2022年より現職。「見る」ことへの人間の飽くなき欲求がどのように文学作品中に描かれたかについて検討した博士論文を執筆後、フランス語圏文学における言語表現と絵画の親近性に関心をもち、研究を続けている。 |

1. 研究の概要

本研究は、第二次大戦後のフランスにおいて、文学と美術が相互的に作用しながら戦後ヨーロッパにもたらされた表象の限界に向き合う過程を明らかにするものである。とくにこれまで注目されてきた詩という特権的ジャンルと絵画の関係ではなく、散文とイメージとの関係に着目する。今年度、検討対象としたのは、戦後パリの抽象表現主義絵画を熱心に擁護した美術史家ジョルジュ・デュテュイ（1891-1973）である。第二次大戦中アメリカに亡命していたデュテュイが、批評のことばと同時に文学的と評される散文表現を用いることに専心するなかで、どのように非西欧の文化にたいする関心を形にしたか、という点に絞って研究を進めた。デュテュイの非西欧文化圏へのまなざしは、現代フランスの抱える脱植民地化の問題系にも深く関与するものであるだけでなく、早い段階から時代にあらがって、非西欧文化圏の美術品の価値を対象地域の社会と密接に結びつける姿勢が確認された。

2. 研究の動機、目的

本研究の目的は、文学（＝ことばの芸術）と美術（＝視覚・イメージの芸術）の関係性が、第二次大戦を経たことによって変革を遂げた経緯を明らかにすることである。本研究において、その変化は散文的な世界観と抽象絵画の興隆の影響のもとに訪れたという仮説を立てた。なぜなら、フランスをはじめホロコーストを経験したヨーロッパは戦後かつてない人間精神の危機を経験し、「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮だ」（アドルノ「文化批判と社会」）とされるほど、表現の世界に決定的な影響をもたらしたからである。ヨーロッパにおける戦後の言語芸術が人間の尊厳とともに捻じ曲げられ、作家たちは言語の機能不全に苦悶することになる。その一方、視覚芸術においては、ヨーロッパ内外の若い世代による新エコール・ド・パリと呼ばれる抽象表現主義絵画の興隆がみられた。

本研究では、こうした状況を同時代として生き、戦後パリの抽象画家を支援したフランスの

美術史家ジョルジュ・デュテュイの動向に焦点を当てることにした。マティスの娘婿であり野獣派の擁護者でありつづけたデュテュイは、同時代の画家・作家との広い交友関係を持つだけでなく、大戦中にアメリカへ亡命した経験から、シュルレアリストやレヴィ＝ストロースらの文化人類学的視点を共有していた。本研究では、その際に書かれた美術批評とは異なる挿画付き散文テキストを取り上げ、その特徴を検討した。

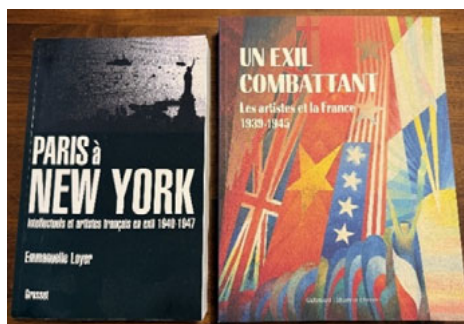
なお、本奨励金の申請当初（2023. 09）において提起された問題をより深める形で、以上のジョルジュ・デュテュイに関する資料収集を行うため、本奨励金による出張先はパリのポンピドゥー・センター内にある視覚芸術資料に特化したカンディンスキー図書館とした。

### 3. 研究の結果

以上の研究は、①今年度前半の文献調査、②後半のパリ出張におけるカンディンスキー図書館での資料調査によって、以下の結果が得られた。

#### ① 第二次大戦前後にかけて活躍した芸術家・知識人の持つ時代背景を確認

渡仏前の研究期間前半には、まずジョルジュ・デュテュイの大戦前後の交友関係とアメリカ亡命時の交友関係を調査した。デュテュイは戦前より美術関係者だけでなくシュルレアリストやジョルジュ・バタイユら前衛的な文芸雑誌を率いる作家たちと交流があったが、その縁により、第二次大戦中のフランスを離れ、ニューヨークへ亡命することが可能であったことが分かった。ニューヨークから戦時フランスの状況を伝えるラジオ番組Voice of Franceを担当していた当時、デュテュイと協働する同胞には、のちに『悲しき熱帯』として刊行されることになる原稿を抱えて亡命したレヴィ＝ストロースもいた。こうした影響のもと、戦前からカナダのブリティッシュ・コロンビアのインディアン社会に関心を寄せていたデュテュイは、ニューヨーク生活中に非西欧社会の生活様式と美術の探索に没頭していたのである。

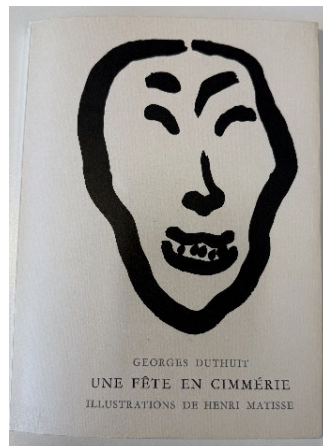


上：第二次大戦中フランスからアメリカへ亡命した芸術家・知識人たちの記録と研究書。

#### ② ジョルジュ・デュテュイの非西欧文化への関心をつづったテキストの調査

研究期間後半のフランス出張においては、ジョルジュ・デュテュイが戦中ニューヨークでの経験をもとに執筆したテキストUne Fête en Cimmérie (1964)（『空想の対称性の宴』未邦訳）を閲覧し、デュテュイの関心のありかとともにその文体的特徴を探った。当該資料は書籍ではあるが、アンリ・マティスが晩年本書のために作成したエスキモーの顔のリトグラフが多数挿入された極希少本であり、日本での入手は困難であるだけでなく、フランスでも刊行当時のかたちで閲覧できる場は限られていた。カンディンスキー図書館では、エスキモーの生活を描く本書を写真資料として収めるほか、本書構想段階でのデュテュイのプラン、刊行に至る出版社とのやり取りを、書簡および手稿資料から確認することができた。ニューヨーク滞在中の鬱屈した気分を表す詩的な散文テキストは執筆当時には刊行できず、マティス晩年のリトグラフの紹介とともに、フランスで脱植民地化による闘争が激化するさなかに刊行にこぎつけた経緯も判明した。

本研究では、こうした時代状況と照らし合わせる形で、デュテュイの非西欧社会へのまなざしが部族美術収集という植民地主義的思考にからめとられながらも、現地住民の生活そのものの力強さに深く魅了され、その社会の成り立ちのなかに美術を位置づけることになる反・美術館思想へと結実することを検討した。



上左：カンディンスキー図書館があるポンピドゥー・センター（2025年3月）。同時期に開催されていた展覧会は黒人芸術家たちを紹介するParis Noirであったことも意義深い。

上右：マティスによるエスキモーの版画を付したジョルジュ・デュテュイのテキスト表紙。

#### 4. 研究者としてのこれからの展望

現在、上述した研究を論文として取りまとめ、公表に向け準備している。また、本研究を進めるなかであらたにインスピレーションを得たことにより、本研究から派生した別の研究課題として、2025年度も女性研究者奨励金への申請、科学研究費・若手研究への応募をすることができた。幸いにも2025年度にあらたな課題で研究費を獲得することができたのは、2024年度の本奨励金による一歩があったからにほかならない。文学という自分の専門分野のみにとどまらず、美術との相互影響関係に目を向け、社会における表現行為の意味を問い直す作業を今後もつづけていくことには大きな価値があると認めていただいたのだと思う。2024年度の研究成果を生かし、今後の個人研究をさらにほかの研究者との協働につなげ、勤務校の学生だけでなく、広く次世代の育成へと還元していきたい。

#### 5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

今回、多数の応募者から本研究を選出していただき深く感謝申し上げます。女性研究者奨励金を受けたことは、私の研究生活にポジティブな変化を与えてくれました。それは何よりも、「この研究をつづけてみなさい」と背中を押してもらうような経験でした。応募当時の私は、私生活においては未就学児の親として家庭生活をまわすことに注力し、公的生活においては専任教員として多数の学生を指導しながら、その合間を縫うように個人の研究を進めていくという生活でした。この道を選んだ者として当然の生活様態であると理解しながらも、身のすり減る思いでした。女性研究者だけでなく、おそらく同じ境遇のどの研究者にとっても、それぞれ壮絶な舞台裏があることは周囲の同僚の話聞いても明らかです。こうした中で、奨励金に採択され、支援をいただけるという機会は、研究生活に活気と覇気をもたらし、さらに一歩踏み出す力を与えてくれます。今回のフランス滞在で、私は大学院時代から見慣れたはずのパリの街を、感謝をかみしめながら眺めることになりました。研究を始めるずっと以前に、はじめてフランスの土地を踏んだ際、また必ず来る、と心に決めたときの真新しい気持ちを思い出しました。

今後も若手研究者・女性研究者への変わらぬご支援をいただけますよう、何卒よろしくお願いいたします。